

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 崔真碩

崔真碩氏の博士号請求論文『李箱のモダニズム研究 1936年を中心に』は、1936年に李箱、牧野信一、横光利一という三人の作家がどのような文学作品を生み出したのかを分析しながら、そのことをふまえて植民地朝鮮と帝国日本の相互関係の中で、東アジアにおけるモダニズム文学の特質をとらえ直そうとした論文である。

崔氏の論文は、序章を出発点として、「Ⅰ部 李箱論」、「Ⅱ部 牧野信一論」、「Ⅲ部 1936論」、「Ⅳ部 横光利一／不在の李箱論」という四部構成になっており、終章で論文全体の結論が示されている。

序章においては、三人の作家を結びつける1936年という年の意味がまず提示されている。第一の理由は植民地朝鮮のモダニズム作家であり詩人でもある李箱が帝国日本の首都東京に来て、友人宛ての手紙の中で牧野信一に言及するということ。第二の理由はその手紙の八ヶ月前に牧野が自殺していること。第三の理由は牧野の自殺の一ヶ月前に帝国日本を拠点にモダニズム文学の旗手として活動していた横光利一が渡欧したことである。

こうした三人のまったく異なる同じ年の行動を通じて、崔氏はモダニズムを規定している「近代」という概念そのものを歴史的にとらえ直しながら、「植民地的近代」と「自己植民地化」という二つを、この論文における中心的な分析概念として位置づける。

「植民地的近代」という概念は、日本帝国主義による朝鮮の植民地支配が、「近代」を実現するうえで、障害となったのか、それとも「近代」化を推進発展させる契機となったのかをめぐる長い対立をふまえた分析概念である。

「自己植民地化」は欧米列強から不平等条約体制を押しつけられて開国した日本が、列強の帝国主義的政策（植民地化）をいち早く内面化し、自ら進んで「西洋」化していこうとする過程として大日本帝国の「文明開化」「富国強兵」政策などを捉え直そうとする概念である。

「Ⅰ部 李箱論」第一章「李箱とその時代」では、大日本帝国に植民地化された朝鮮において、日本語日本文学を通して近代文学や近代思想が受容されたことが明らかにされる。とりわけ李箱にとって横光利一が強い影響を与えたことが「翼」という小説を具体例としながら明らかにされていく。

「第二章 李箱の内在的矛盾」では、李箱の文学的出発から東京行きまでの文学的活動が時系列に即して整理されており、「失恋」という契機により、「敗北」することが李箱にとって、一つの文学的方法として自覚されていくことが明らかにされている。

「第三章 京城の身体としての「翼」」では小説のテキストの分析から京城における植民地的近代化の在り方が明らかにされ、「第四章 「敗者」の思想」は、李箱が帝国主義を常に拒絶しつづけてきた位置として「敗者」であることを選びとったという事実を明確にしている。

「Ⅱ部 牧野信一論」の「第五章 牧野の近代体験」では牧野信一が生まれ、文学活動の拠点にした小田原が、日本の「近代」化の歴史過程において、どのような位置におかれていたかを分析し、「第六章 「ギリシア牧野」異論」では、父を通して内面化したアメリカについての認識から、牧野文学の特徴を植民地主義的支配に対する抵抗であったことを明らかにしている。これはこれまでの牧野信一研究の在り方を大きく転換し、その水準を飛躍的に高めた論として評価できる。

「第七章 思想家としての牧野」では、牧野のアメリカとキリスト教に対する捉え方を、その歴史認識の在り方から問い直し、牧野の小説表現の細部に、戦争にむかって突き進んでいく時代に対する憂慮があらわれていることを証明した。これも牧野信一研究としては画期的成果である。わけても牧野信一論が、日本における鉄道開発の問題と常に関連づけられ、牧野の小説テキストが、鉄道資本主義に言及しつづけていたことを証明したことは重要である。

「第三部 1936 論」は「第八章 李箱の東京行きをめぐる」において、現実の東京の「近代」が、表面的で「キザナ」「ホンモノの振り」をしていることにすぎないことへの幻滅と、朝鮮の成川を描くことが「近代主義者としての自己の解体」につながったことを分析的に跡づけている。そして「不逞鮮人」として抹殺された李箱の死に、時代の転換点を崔氏は位置づけている。

「第九章 コロニアリズム—横光利一『欧州紀行』」では、横光のこの時期の文学的实践と李箱のそれとを対比的に比較しながら、前者の植民地主義へ傾斜していく在り方と、後者の、とりわけ牧野信一を内面化した李箱のポストコロニアリズムとを先鋭的に対立させて論じている。ここに本論文の最も中心となる論点があらわれている。

「IV部 横光利一／不在の李箱論」の「第十一章 1936—1937」と「第十二章 横光利一とアジア」では、横光の『旅愁』という小説における西欧「近代」についての認識と、同じ時期の植民地朝鮮に対する認識とを相互に関連づけながら、横光の中にある「帝国主義的植民地主義」の特徴を批判的に分析している。

「第十三章 横光利一と竹内好」では、太平洋戦争に突入した時期における二人の文学者の姿勢の違いをきわ立たせながら、西洋の植民地主義への対抗として装われた「大東亜認識」が「自己植民地化」の帰結としての植民地主義的帝国主義の日本的表れであることが明らかにされている。また、竹内好を論の中に呼びこむことによって、「近代の超克」をめぐる論争の全体像を明らかにしながら敗戦後にいたる問題に論点を接合することが可能になっている。

また、竹内好が論じた魯迅の思想と李箱が、終章において重ねられることによって、東アジアの「近代」における、独自の思想の在り方の可能性が提示されている。それはまた、大東亜戦争と大東亜文化の方向に対して、自己否定をしつづけ竹内好の、戦後日本における思想の独自性を明確にすることであった。

李箱、牧野信一、横光利一の相互関係の中で、東アジアにおける戦争の時代とモダニズムとの関係をとらえようとした本論文についての公開審査の中では、四部構成の各部相互の内的関連性の不十分さ、分析対象とした小説や詩作品の選択基準の恣意性、研究論文になじまない表現、参考文献リストの不備などについて指摘があった。しかし、植民地朝鮮の文学の側から、宗主国大日本帝国の「近代」化とモダニズムを批判的に相対化し、この東アジアの力関係の構図から欧米列強としてのキリスト教文化圏の人々による、数百年にわたる世界を植民地化しつづけたことに対する明確な批判を行ったこの論文の達成は評価できる。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。